7課

8月16日

命のパンと水

安息日午後 8月9日

暗唱聖句

そこで主はモーセに言われた、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに六日目には、ふつか分のパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのその所にとどまり、七日目にはその所から出てはならない」。こうして民は七日目に休んだ。（出エジプト記 16：28～30、口語訳）

主はモーセに言われた。「あなたたちは、いつまでわたしの戒めと教えを拒み続けて、守らないのか。よくわきまえなさい、主があなたたちに安息日を与えたことを。そのために、六日目には、主はあなたたちに二日分のパンを与えている。七日目にはそれぞれ自分の所にとどまり、その場所から出てはならない。」民はこうして、七日目に休んだ。（出エジプト記 16：28～30、新共同訳）

今週の聖句

出エジプト記 15：22～16：36、創世記 3：1～6、出エジプト記 17：1～7、Ⅰコリント 10：4、出エジプト記 18：1～27、Ⅰコリント 10：11

今週のテーマ

エジプトを出て、イスラエルは約束の地へ向かう未知の旅の途上にありました。人々は過酷な長旅に直面し、多くの新しい教訓を学ぶ必要がありました。主は導き、養い、彼らの成長を助けたいと望んでおられましたが、彼らは、規律、自制心、犠牲、利己心、主への信頼、特に従順を学ぶ必要があったのです。

モーセは目に見える指導者であり、人々が成功を収めるためには、彼と彼の指導に従わねばなりませんでした。彼らにとって、一緒にいること、共同体として協力すること、互いに助け合うことが重要でした。前途には多くの障害と困難がありました。霊的成長の多くは、彼らがそれらの困難にどう対処し、特に大きな困難が起こったときに、モーセにどう対応するかにかかっていました。

彼らは、「千里の道も一歩から」という有名な中国人のことわざどおりの状況にあり、一歩ごとに主の命令を信頼する必要がありました。しかし残念ながら、これから見ていくように、彼らはその教訓をそう簡単には学べませんでした。

日曜日　8月10日　苦い水

聖書の物語では、善人であれ、悪人であれ、さまざまな登場人物がさまざまな役割を演じており、話の筋、場所、タイミング、敵役に細心の注意を払う必要があります。しかし、一つの物語の筋書きで最も重要な点は、多くの場合、解決策と得られた教訓です。それは、これらの物語でも変わりありません。

聖書のエピソードが示すように、神は問題の解決者であり、平和をもたらす方ですが、その働きは、人々の不信仰によって複雑になります。ヘブライ人は、絶えず不平を言い、不従順であったために、深刻で厄介な事態を、さらには悲劇さえ経験しました。不信と強情さのゆえに、彼らは多くの困難を自らの身に招いたのです。

問1　出エジプト記15：22〜27を読んでください。葦（あし）の海を渡ったあと、最初に奇跡が起こった背景は、どういうものでしたか。

イスラエルの信仰が最初に試されたのは、水の必要性に関係していますが、過酷で、暑く、乾燥した砂漠の環境を考えれば、意外なことではありません。3日間の旅のあと、人々はようやく水を見つけましたが、その水は飲めませんでした。「マラ」は、「苦い」という意味で、水が苦かったので、思いやり深い主に対するイスラエルの信仰は、たちまち揺らぎました。しかし、神は憐れみをもって対応してくださり、最初の奇跡が1本の木を用いてなされました。もちろん、水を甘くて飲めるようにしたのは、木ではなく、主でした。人々は、二つの重要な教訓を学ばねばなりませんでした。(1) 主のタイミングを忍耐して待つということ、(2) 神は人間と協力して物事を行われるということです。

しかし、イスラエルの子らは、あまりにも多くのことを当然と思い込み、神が彼らのためにしてくださった偉大な奇跡をすぐに忘れてしまいました。それらの奇跡について、彼らは神を熱心に賛美してこう明言したばかりでした。「主よ、神々の中に／あなたのような方が誰かあるでしょうか。誰か、あなたのように聖において輝き／ほむべき御業によって畏れられ／くすしき御業を行う方があるでしょうか」（出15：11）。

それにもかかわらず、彼らが不平を言ったあとでさえ、神は、エジプト人を悩ませてきた「病を一つも」（出15：26、口語訳）イスラエル人には下さないと約束されました。神は彼らを守られるのです。彼らがこの約束を経験できるのは、神に忠実であり続けるという条件においてのみでした。

あなたは、どんな試練や困難を自らの身に招いたことがありますか。

月曜日　8月11日　ウズラとマナ

残念ながらこれらの長旅の記事には、反逆のパターンが繰り返し登場します。人々は、神の力強い御手がこれまで彼らを助け、神が彼らの問題の解決策を与えてくださったことを忘れてばかりいました。彼らは目の前の問題によって、最終的な目標や約束されたすばらしい未来を見失っていたのです。これは、今日の神の民の間でもよく見られる問題です。

問2　出エジプト記16：1〜36を読んでください。イスラエルの人々の不平不満の原因は何でしたか。その後、どんなことが起きましたか。

聖書における誘惑がしばしば食べ物に関連していることに気づくことは、重要です。エデンの園で、堕罪は善悪の知識の木の禁断の実を食べることに関係していました（創2：16、17、3：1〜6）。イエスに対する荒れ野での誘惑において、サタンの最初の試みは、食べ物を通してでした（マタ4：3）。エサウは自制心のない食欲のために、長子の権利を失いました（創25：29〜34）。イスラエルの不従順は、どれほど頻繁に食べ物や飲み物に関係していたことでしょう！ モーセが後世の人々にこう言い聞かせたのも不思議でありません。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」（申8：3）。

言うまでもなく、マナは、イスラエルの人々が荒れ野に滞在していた40年の間、神がお与えになった天のパンでした。この賜物を通して、神は彼らに、ご自分が万物の創造主であり、提供者であることを教えられました。また、超自然的にマナを与えることを用いて、いかに第七日安息日を守るかも示されました。

毎週、四つの奇跡が起こりました。(1) 週5日間、神は1日分のマナを与え、(2) 金曜日には、2倍のマナを与えられ、(3) そのマナは金曜日から安息日まで腐らず、(4) 安息日にマナは降りませんでした。神は、人々が安息日を覚え、その日に神の憐れみを祝うために、これらの奇跡を繰り返し行われたのです。神はこう言われました。「よくわきまえなさい。主があなたたちに安息日を与えたことを」（出16：29）。

人は食べることが好きです。私たちは食べることを喜ぶように創造されました。土から生じる豊富な食べ物は、神が私たちに食べることだけでなく、食べる物自体を喜ぶことを望んでおられることを明らかにしています。しかし、このすばらしい賜物である食べ物は、いかに悪用されうるでしょうか。

火曜日　8月12日　岩から出た水

荒れ野では、たくさんの水が必要です。イスラエルの人々は神と争い、神を信頼せず、彼らに水を与えることのできる神の能力や与えようとする御心さえ試したにもかかわらず、神はこの問題に対処してくださいました。彼らは不信仰から、エジプトを懐かしみました。

問3　出エジプト記17：1〜7を読んでください。人々は、この事件からどんな教訓を学ぶべきでしたか。

モーセはその場所を、「試し」を意味する「マサ」と、「争い」を意味する「メリバ」と呼びました。主は、イスラエルの人々の不信仰にもかかわらず、水を与えられました。これら二つの名前は、神を試したり、神と争ったりすべきでないことを人々に思い出させるものでした（ヘブ3：7、8、15）。彼らは神の臨在だけでなく、神の力と権威を示す多くの具体的な証拠をすでに見ていたにもかかわらず、神が彼らの間におられることを大いに疑ったのです。

「モーセは岩を打ったが、モーセのかたわらに立って、命の水を流れさせたのは、雲の柱におおわれていた神のみ子であった。モーセと長老たちばかりでなく、離れて立っていた会衆のすべてが主の栄光を見た。しかし、もし雲が取り除かれたら、彼らはその中にとどまっておられるお方の恐るべき輝きで殺されたであろう」（『希望への光』151ページ、『人類のあけぼの』第26章）。

水は命の象徴です。水がなければ、命は存在しないからです。私たちの体のすべての細胞は、水を必要としています。私たちの体の60パーセントは水であり、骨でさえ、一部は水でできています。したがって、荒れ野で彼らに水が与えられたことは、イスラエルの人々にとって、神が彼らの必要を気にかけておられ、彼らが神を信頼できるというしるしでした。しかし、繰り返し言いますが、彼らは従わねばなりませんでした。

何世紀も経ってから、パウロはⅠコリント10：4で、荒れ野におけるイスラエルの人々の経験が独特なものであったことを、信者に思い出させています。キリストご自身が彼らを導いただけでなく、彼らに水を与え（詩編78：15、16）、そのほかの霊的、肉体的な必要も満たされたのです。パウロは、「この岩こそキリストだった」と明言しています。彼らにとって、キリストは命の源、永遠の命を与えるお方でした。岩が硬いように、神は民をしっかりと導かれました。神は約束を必ず果たされるので、人は神に頼ることができます。

今、あなたが神に信頼する必要があることは、何ですか。

水曜日　8月13日　エトロ

モーセは、レウエルとも呼ばれる（出2：18）しゅうとのエトロの訪問を受けました。エトロは、モーセの妻ツィポラと2人の息子ゲルショムとエリエゼルを連れて来ました。モーセは、彼らがやって来ると聞いて、歓迎するために出て行きました。

問4　出エジプト記18：1〜27を読んでください。この民の歴史の中で、どんな大きな一歩がここで踏み出されたのでしょうか。

エトロが来たのは、神がイスラエルのためになさった驚くべき救出について聞いたからです。モーセはエトロに、「主がイスラエルのためファラオとエジプトに対してなされたすべてのこと、すなわち、彼らは途中であらゆる困難に遭遇したが、主が彼らを救い出されたこと」（出18：8）を詳しく語りました。

エトロは、神の思いやりとご自分の民のためになされた並外れた介入を賛美し、こう明言しました。「主をたたえよ／主はあなたたちをエジプト人の手から／ファラオの手から救い出された。主はエジプト人のもとから民を救い出された。今、わたしは知った／彼らがイスラエルに向かって／高慢にふるまったときにも／主はすべての神々にまさって偉大であったことを」（出18：10、11）。

ここに見られるのは、神がご自分の民の間でなさった働きが、真の神がどんなお方であるか、また神がご自分の民のためにどんなことをおできになるかを、世に証しするものであったという一例です。

エトロは、真の神について学ぶと同時に、彼自身も神の民に提供できるもの、すなわち、賢明で有益な助言を持っていました。モーセは、公正かつ公平な原則に基づいて法制度を整える必要がありました。彼はまた、献身的で誠実な裁き人たちも必要としていました。エトロは賢明にも、次の資質を列挙しました。(1) 神を畏れる人、(2) 不正な利得を憎む人、(3) 信頼に値する人。このような良い資質を持つ有能な人材を、「千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長」として民の上に立てる必要がありました。このような方法によって、モーセの管理上の負担が軽くなり、重要な問題に集中できるようになります。そして、人々のためにもなるのです。

モーセはエトロの賢明な助言を受け入れ（出18：24）、異なる単位の管理を担う指導者たちを任命しました（申1：9〜18も参照）。

モーセは、ヘブライ人でもないエトロの言葉を無視することもできたはずですが、そうしませんでした。その姿勢から、どんな教訓を学べるでしょうか。

木曜日　8月14日　命のパンと水

問5　Ⅰコリント10：11を読んでください。パウロは、これらの出来事が記録された理由を、どのように説明していますか。

パウロは、イスラエルの人々に起こったことは、キリストに従う者たちにとっての前例や警告であり、彼らが同じ問題を避けるのに役立つだろうと説明しています。これは、「時の終わり」に生きる私たちにとって、適切な教えです。神はご自分の民に聖霊を与えて、「力と愛と思慮分別」（Ⅱテモ1：7）で強め、彼らが正しい決断をして神の教えに従うことができるようにしてくださいます。イエス・キリストは、新しい命の源であり（ヨハ14：6）、彼だけが私たちを「神に喜ばれる聖なる生けるいけにえ」（ロマ12：1）に変えることがおできになります。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」（同12：2）。

のちに、イエスは、マナと水に関する記事から教訓を引き出し、それらの象徴を用いて、荒れ野で彼らを導かれたご自身についての真理を教えられました。

問6　ヨハネ4：7〜15、6：31〜51を読んでください。私たちクリスチャンにとって、どんな真理がここで明らかにされていますか。

サマリアの女は、ほかでは手に入らないものをキリストが提供してくださることに気づきました。平和、喜び、幸福に対する内なる渇きは、神から来るものであり、したがって神だけがその渇きを満たすことがおできになります（詩編42：2、3〔口語訳42：1、2〕）。

のちにイエスは、マナとの関連で、それを人々に与えたのはモーセではなく、神であると説明し、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることが……ない」（ヨハ6：35）と明言なさいました。イエスは、ご自分が命のパンであると二度繰り返されました（同6：35、48）。

荒れ野でのマナが「天からのパン」（ヨハネ6：31、32）であったように、岩からの水は、彼らの渇きを満たすためのキリストの賜物でした。パンと水には霊的な意味もありました。イエス・キリストは「命のパン」（同6：35、48）であり、「生きた水」（同4：10、11、14、7：38）だからです。したがって、主においてのみ、私たちの霊的な飢えと渇きは、真に満たされるのです。

金曜日　8月15日　さらなる研究

参考資料として、『人類のあけぼの』第26章「紅海からシナイへ」を読んでください。

水に関する事件から間もなく、この民は新たな危険に直面しました（出17：8～16参照）。残忍で好戦的な部族であるアマレク人が、彼らを攻撃したのです。

「アマレク人は、神のご品性や主権について無知ではなかった。しかし、彼らは、神をかしこみ畏れようとしないで、神の力に公然と反抗した。アマレク人は、モーセがエジプト人の前で行った不思議な業を嘲笑し、周囲の国民の恐怖をあざけった。彼らは、ヘブル人を１人も残さず滅ぼすことを彼らの神々にかけて誓い、イスラエルの神は無力で自分たちに抵抗できないと威張った。彼らは、イスラエル人から害を受けたこともなければ、脅かされたこともなかった。彼らの攻撃は、全然挑発されたものではなかった。アマレク人がイスラエル人を滅ぼそうとしたのは、イスラエルの神に対する憎しみと反抗を示すためであった。アマレク人は、長年の間、横暴な罪人で、彼らの罪悪は、その報復が行われることを神に叫び求めていたが、神の憐れみは、依然として彼らの悔い改めを促していた。しかし、アマレク人の男たちが、疲労して全く防備のないイスラエルの隊列を襲ったとき、彼らは自分たちの国民の運命を決定した」（『希望への光』152ページ、『人類のあけぼの』第26章）。

話し合いのための質問

❶ 神がご自分の民に対してなさったことから、エトロが真の神についていかに学んだのか、さらに考えてみてください（出18：8～10参照）。その原則は、なぜ今日でも当てはまるのでしょうか。自分自身や安息日学校のクラスの仲間に、問いかけてみてください。「私たちの教会は、この世にどんな証しをしているだろうか。神のご性質やご品性について、この世に何と語っているだろうか」

❷ Ⅰコリント10：4を読み直してください。この聖句は、今日、一部の人が信じている古代の異端、つまり旧約聖書の神は、私たちがイエスの内に見るものとは対照的に、復讐心に燃え、憎しみに満ち、赦さないお方であったとする考えについて、どんなことを教えてくれるでしょうか。この聖句は、その考えがなぜ間違っているのかを、いかに示していますか。

❸ アマレクには、真の神について学ぶ機会がいかにあったかについて、エレン・ホワイトが書いたこと（金曜日の引用文）をもう一度読んでください。彼らの態度とエトロの態度を比較してください。なぜ神は、彼らに対してだけでなく、イスラエルが接触した古代世界の多くの部族に裁きを下されたのか、その理由について、どんな教訓を得ることができますか。